

ふるさとづくり コーナー

ふるさとづくりは人づくり

去る十一月六日、大月市民会館で、「南北都留地区ふるさとづくり県民のつどい」が開催され、本市からも、自治会連合会・市政モニター・連合婦人会などの代表約五〇名が出席しました。

この催物は、昨年十一月、南都留地区全市町村が参加して行なわれた「ふるさと芸能のつどい」がお祭りの色彩が強いのに対して、討論会、事例発表会などを中心とした内容で、ふるさとづくり運動の真のねらいについて参加者に理解していただくという主旨で開かれました。

特別参加した望月知事はあいさつのなかで、ふるさとづくり運動の取り組み方について、「よその



▲「南北都留地区ふるさとづくり県民のつどい」で事例発表する佐藤毅さん

う。」と激励しました。つづいて、各地で取り組んでいるふるさとづくり運動に関する活動事例が発表されました。

富士吉田市の市村隆男氏による浅間町の美化運動、大月市の土屋璋氏による老人の生き甲斐対策としてのゲート・ボール教室など具体的な例示は、ふるさとづくり運動を推進してゆくうえで、たいへん参考になりました。

本市からは、緑町の佐藤毅氏が「ふるさとづくりは人づくり」と題して、佐藤さん自身が地域のリーダーとして活動している、緑町スポーツ少年団の歩みについて発表しました。このスポーツ少年団は規律正しい生活を送るなかで自己鍛練を重ね、物事の本質を素直な気持ちで受けとめられる精神を培かおうという佐藤さんの呼びかけで昭和三十八年に発足しました。

は、まさに「密林の王」にふさわしい貴族です。

虎の目は、特注の凸レンズ様のガラス眼球でできていますが、この当時ガラスは、ギヤマンと呼ばれて、たいへん珍らしいものでした。また、虎の爪・牙はともに、メッキされた真ちゅう製で、これだけでも両虎の威厳ある恐ろしさが迫ってきます。

製作年代は文化年中（一八〇四～一八一七年）と伝えられており葛飾北斎が最も充実していた時期の傑作といえるでしょう。

今月のふるさとカレンダー

十二月の写真説明

屋台の飾幕「虎」

緋ラシャにうそぶく雌雄の両虎は、金糸・黒糸のんだら虎模様で縫いとられ、あしらった緑の竹も岩も、影が薄いほど猛々しい姿で表現されています。四肢なお太く、尾がそり返り、岩に左脚を踏まえて威勢を示す姿



早朝マラソンというと現在では愛好者層もかなり広がりをみせていますが、この当時では理解者は少なく、人集めに苦労したそうです。毎朝のことですから中途落伍した者もありましたが、小学校四年生から中学校三年生まで約四十名で構成されたこのスポーツ少年団は、メキシコオリンピックが開かれた昭和四十三年九月までに、走行距離の累積で、地球一周（三万七千キロメートル）という快挙をなしとげました。この間の個人別走行距離の集計には、佐藤さん

花でまちを

かざろう！

旅先で、街路樹の下に整然と並べられたフラワーポットに咲き乱れるかれんな花をみたとき、何となくほっとした気分になるもので。また、日々の生活のなかで、



▲花を植える都留一中の先生方

があたり、走行距離の比較表をつくっては団員を励まし、脱落者の防止に努めたそうです。

佐藤さんは昭和五十一年、桂高校校長を最後に、長年なじんできた教壇を去り、第二の人生を歩んでいます。現在でも総合スポーツクラブに発展した緑町スポーツ少年団の育成に尽力しています。

美しいものをみて美しいと、素直に認められる健全な精神を養なうこと——ふるさとづくりの原点はこの辺にあると佐藤さんは語っています。

花に囲まれたひとときを持てたら、ずいぶん心もなごむことでしょう。

「花いっぱい運動」は、人々の心にやすらぎと希望を与え、さらに進んで、環境美化との連携も図ろうと始められた運動です。

モデル団体の指定を受け、去年から行なっているこの運動は、市民の感心も強まっており、来るべき国体には、来市する選手団を花で迎えようと、花を育てる運動推進協議会では、今からはりきっています。

この運動の一環で、先ごろ市内三方所の歩道などに、リサイクル運動の産物、フラワーポット百基が備えつけられました。

さっそく、市職員などによって大きく育ったハボタンが植えられましたが、これから冬を迎えて、花の少ないときに、人々の目を楽しませてくれることでしょう。